

3

鉛筆の持ち方指導の工夫

硬筆指導の工夫（低学年編）

元静岡市立服織小学校校長

松本健作

これまで、中・高学年を例に、硬筆指導の工夫についてお伝えしました。今回は、低学年を例に、硬筆書写の基本となる、鉛筆の持ち方についてお伝えします。

はじめに

新年度を迎えたこの時期、新入学の一年生は、筆記具を使って、文字の学習を始めます。技能教科である音楽や体育では、楽器や運動器具・道具（鉄棒、なわとび、ボールなど）に慣れ、道具と体の一体感を養うことが技能向上に役立ちます。同様に書写では筆記具に慣れ、正しく執筆することが大切になってきます。現行の学習指導要領（第一学年及び第二学年）には、「姿勢や筆記具の持ち方を正しくし……」という内容が示されており、『書写』教科書には、字を書くときの姿勢や、鉛筆の持ち方の例が示され

ています。（新しい学習指導要領にも同様の内容が示されています）  
低学年のうちに、筆記具の正しい持ち方を身につけておくことは、書写活動の基礎を養ううえで基本となります。  
そこで、今回は、鉛筆の持ち方指導とその定着法について、低学年の書写授業を通じて紹介したいと思います。

児童の主體的な活動を促すには

新しい学習指導要領では、児童の「主體的・対話的で深い学び」の視点に立つた授業改善を呼びかけています。

○学習形態の工夫

教師と児童が面と向き合う授業ばかりではなく、ときには三〜四人のグループをつくり、話し合ったり、相互に見せ合ったりする学習形態を取り入れるとよいでしょう（※1）。自分がどんな姿勢で書いているのか、鉛筆の持ち方は正しいのか、自分を客観的に診断・評価することとは難しいものです。低学年、特に一年生は、正しい鉛筆の持ち方について指導を受けるのが初めての児童も多いと思います。みんなで確かめ合いながら身につけていく丁寧な指導が求められます。

○児童の実態把握

児童の鉛筆の持ち方の実態を知ることも大切です。連載第一回（中学年編）で取り上げたような、線をなぞらせる活動を通じて、実態を観察します。具体的方法としては、児童一人一人が鉛筆で線をなぞる姿を、教師がカメラで撮影していくというものです。一人あたり数秒の撮影時間であれば、三〜四分でクラス全員の様子を記録することができます。個別指導に生かすために、早い段階で撮っておくとよいと思います。

鉛筆の持ち方診断と正しい持ち方の維持方法

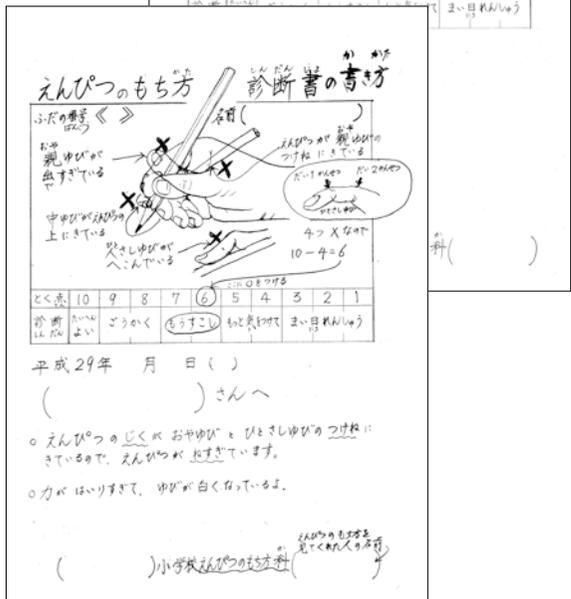
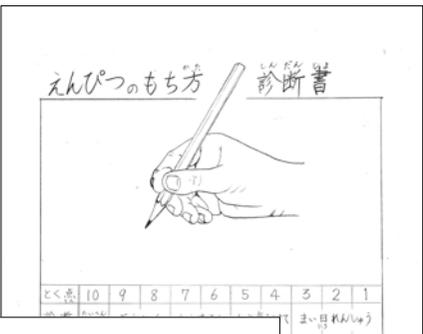
ここでは、鉛筆の正しい持ち方を身につけていくための具体的な方法をご紹介します。

(1)児童が互いに鉛筆の持ち方を確認し合うためのシート「えんぴつの持ち方診断書」(※2)と「えんぴつの持ち方診断書の書き方」(※3)を配布します。



▲※1 グループでの学習の様子。

▼※2 「えんぴつの持ち方 診断書」



▲※3 「えんぴつの持ち方 診断書の書き方」 診断のポイントや、書き方の例が示されています。

1951年静岡県生まれ。静岡県書写書道振興会副理事長、前静岡県書写書道教育研究会長。県内の小・中学校や書道教室で講師を務める。光村図書小学校「書写」教科書編集委員。





▲※6 自由に線をなぞっているAさん。



▲※7 「ティッシュ丸める法」で文字を書くAさん。



▲※8 補助具なしでも、持ち方も姿勢もよくなっている。

左の写真(※6)は、児童の筆記具の持ち方の実態を調べるために、自由に線をなぞらせている様子です。鉛筆の持ち方も姿勢もよくありませんが、「ティッシュ丸める法」を試してみると、中段の写真(※7)のように鉛筆の軸が立ち、自然に姿勢もよくなりました。

四十五分間の授業の中で、すぐに効果が出るのは、「ティッシュ丸める法」や、「輪ゴム法」です。慣れてくると、どの

児童も、下段の写真(※8)のように、補助具なしでも、自分で直しながら書こうとするようになります。

文字の組み立て方を意識して書くとき、字形が整ってくるように、持ち方を意識して正しくすると、他の学習要素(この場合は姿勢)も改善される傾向が見受けられました。

もちろん鉛筆の持ち方は、たった一回の授業で改善されるものではありません。全国のどの学年・学級でも大きな課題となっており、保護者も教師も、できることなら何とかしたいと願っていることでしょう。

この「ティッシュ丸める法」と「輪ゴ

ム法」は、費用も時間もかからない方法ですので、あらゆる書写活動に導入をおすすめします。正しい持ち方が持続することは、定着への早道です。

最後に、大切なポイントをまとめたいと思います。

- ・唱えるだけでは上達しません。
- ・実態を知るだけでは何も起こりません。
- ・具体的な解決法を示し、繰り返し練習し継続できる時間と機会を提供してあげましょう。

児童は、仲間とともに、自らの執筆の課題を知り、自分に合った具体的解決法を日常に取り入れて、自分で成長していく姿を見せてくれるでしょう。

## 筆記具の持ち方がよくなる 姿勢もよくなる

この診断書を使いながら、児童は相互に医者と患者になり、相手の執筆する姿を見て評価したり、見られていることを意識しながら鉛筆を持つ体験をしたりします。このとき、日常の実態を知るために、いちばん持ちやすく、書きやすい握り方を診断してもらおうようにします。

(2)役割分担を決めます。

診断をする児童は、握り方がよく見えるところに移動し、診断書に、正しい位置になっていない指や手の部分に×印でチェックを入れ、改善点を書き込みます。教科書の写真や診断書のイラストとの違いを見つけて、点数制で評価します。

正しい持ち方が分かっていても、書き始めると握り方が次第にくずれてしまうのが実態です。正しい持ち方を維持するため、多くの補助具が市販されていますが、お金をかけることもなく、身の回りのもので代用する方法をご紹介します。

### その①「ティッシュ丸める法」

教科書や「えんぴつのもち方 診断書」に示されているとおり鉛筆を持つと、人さし指と親指のつけ根に空間ができます。この空間が必要なのですが、多くの児童が、親指のつけ根に鉛筆の軸を置いてしまうので、そこにティッシュを丸めて詰め込み、鉛筆の軸が手前に倒れないようにします。児童の手の大きさに合わせて、適度にティッシュをちぎります(※4)。ティッシュペーパーはソフトタッチなせいか、児童には好評で、「やりやすい」「これならうまくいく」といった声がよく聞かれます。

### その②「輪ゴム法」

正しい持ち方をしているところに、鉛



▲※4 ティッシュ丸める法



▲※5 輪ゴム法

筆、人さし指の順に輪ゴムを通して、人さし指の第二関節と第三関節の間にはめ込みます(※5)。この方法は以前から知られていて、自然な形で執筆できます。ただ輪ゴムは、折径二・五センチメートルくらいのが理想で、折径六センチメートルくらいのが一般的な大きさのもの、二重にしなければいけないので児童には扱いが難しくなります。

